

藤杜ふぢのもりの社は墨染すみぞめの北にあり。本殿の中央は舍人親王いへひとしんわう、ひがしは早良親王さうらしんわう、西は伊予親王いのしんわうを祭る。「又本朝武功ぶこうの神を

配祀じんむし奉る、神武天皇じんむ、神功皇后じんぐくわうこう、日本武尊やまとたけのみこと、武内宿祢たけのうちのみこと等なり。故に弓兵政所きうひやうのまんどころと号す」

舍人親王いへひとしんわうは天武天皇てんむの皇子にして、天平宝字三年に追尊あり、崇道すだう尽敬皇帝じんけいと号す。「養老年中に勅をうけて日本記を

撰し給へり」例祭は五月五日にして、産子は武具を着して走馬する事は、光仁帝くわうにんていの御宇天応元年に、異国の蒙古もうこ日本へ

攻来るよし聞えければ、天皇第二の皇子早良親王さうらを大將軍として、退治あるべきよし宣旨を賜る。親王当社に祈誓して

五月五日に出陣し給ふ。神威いちじるく忽暴風大に吹来り、蒙古もうこの軍船浪にたゞよひ悉亡びうせけり。此吉例によりて

毎歳軍陣の行粧をなし、天下平安の禱とし給ふ。当社を弓兵政所きうひやうまんどころといふは此所謂によるともいふ。

旗塚はたづか〔本社のひがしにあり、神功皇后じんぐくわうこう三韓退治の後、旗をこゝに埋め給ふとなり〕

蒙古塚もうこづか〔当社森の中に七ツありとぞ、今詳ならず、夷賊退治の後、軍將の首をこゝに埋て神威を現し給ふなり〕力石ちからいし

〔祭日には産沙うぶすなの人集りて此石を打かへし、ちからをためしけるなり〕